

一人一人を大切にする社会

(原文)

板垣 百英 (18 歳)

山形県

山形城北高等学校

「優しさ」というテーマを見た時、私は直ぐに小学生の時に感じた「優しさ」を思い出しました。「あの人は優しいよね。」などと表面的に言う事がよくありますが、私が体験した「優しさ」は心の奥深くが温かくなる様な本物の「優しさ」でした。

私が小学 6 年生の時です。幼い頃から私を育ててくれた祖父が癌になりました。祖父はどんな時でも真剣に私の話を聞いてくれて、いつも味方でいてくれました。そんな優しい祖父の事が大好きで、私にとって心の拠り所でした。癌の影響で大きかった祖父もどんどん痩せていき、色々な事が出来なくなっていました。私は不安と寂しさでいっぱいでした。自宅の布団で横になり、小さくなった祖父の姿を見た時、人間はこんなに変わってしまうものなんだと知り、不思議な気持ちになりました。祖父にどんな言葉を掛ければ良いのかさえ分かりませんでした。

そんな時、訪問看護に来てくれた看護師さんに会いました。祖父の体を拭いてくれたり、足をお湯につけて丁寧に洗ったり温めてくれたりなど、とても手際良く祖父のことを大切に扱ってくれる様子に感動して見てしまいました。そんな私に看護師さんが話し掛けてくれました。

「どんなおじいちゃんなの？」

介護する祖母にもゆっくり話を聞いてくれました。祖父の少年時代や父親、夫としての姿、友人との関係や趣味。私も祖母も心が少し軽くなった様に感じました。そして帰り際に、

「時間外になっても大丈夫です。何か困った事があったり様子がおかしかったりしたら、遠慮なく連絡してくださいね。」

看護師さんは私の祖父の事をよく知ろうとしてくれて、大切にしてくれました。そして、私や祖母の不安を取り除こうとしてくれる思いやりのある深い「優しさ」を感じました。

その後、体調が悪くなった祖父は入院することになりました。入院して暫くすると祖父は意識が戻らない状態になってしまいました。祖父はこのまま私と話をすることも笑顔を見せてくれることもなくなるのだと思い、虚ろな気持ちで見つめている時、担当のお医者さんが来ました。そしてこれまでの祖母の介護や家族の協力を褒めてくれました。お医者さんの掛けてくれた言葉に、張り詰めていた家族の心が穏やかになった様に感じました。

「午前 5 時 10 分、ご臨終を確認いたしました。」

厳粛に静かな口調で祖父の最期を伝えてくれたお医者さんの様子を見た時、私は落ち着いて祖父の死を受け入れる事が出来ました。

祖父が病気になった時から、動揺する私達家族を思いやってくれて、私の大切な祖父を大切に扱ってくれた看護師さんとお医者さん。その「優しさ」に私はずっと感動していました。私も、関わるひとり一人が誰かにとって大切な人なのだという事を心に留め、「優しく」したいと心から思いました。

私が中学生になった時でした。クラスの中にどうしても辛くて学校へ来る事が出来ない友達がいまいました。その時私は、お医者さんが祖父に掛けていた言葉を思い出しました。

「我慢して頑張らなくていいですよ。痛みだけ取りましょうね。」

友達が学校へ来られない事は私にはどうにも出来ない事でした。だから独りぼっちの寂しさや不安だけは取り除いてあげようという一心で、学校の様子や連絡を伝えに家に行ったり、メールやお喋りをしたり、それだけをしよう。と思いました。私は、あの時のお医者さんにヒントを貰った様に思います。

「優しさにあふれる社会」とはどんな社会だろうかと考えた時、「一人一人を大切にする社会」だと私は思いました。私にとって大切な祖父を、大切に天国へ見送って下さった看護師さんやお医者さんの様に、私も、関わるひとり一人と大切に向き合っていきたいです。そして「優しさあふれる社会」を作れる様な大人になりたいと思います。